家屋の「はし」考

山本利達*

要旨

中古文において、家屋について、「はし」という語がよく用いられている。辞書では、(1)廂の間、(2)廂の間の簀子に近い部分、(2)簀子をさすとする三説があり、注釈書でもこの三説がみられる。しかし、同一の文章の中の「はし」について理解が分かれていることがある。そこで、家屋における「はし」はどこをさしているのか。源氏物語の用例について検討してみたところ、(a)廂の間、(b)廂の間の下長押に近い隅の辺り、(c)簀子をさす場合があり、「はしつかた」の例では、(a)と(b)の場合があり、「はしのかた」、「はしちかし」「はしぢかなり」という例においては、(b)の用法のみであることがわかった。

中古文に用いられている「はし」という語の中、「簾のはし」と、「ふみのはし」との「はし」については、その意味を考察したことがあるが、(注)中古文でよく用いられている家屋の「はし」については、家屋のどの部分をいうのか明らかにされていない。源氏物語の用例を中心にして以下に考察することにする。考察に当たっては、次の源氏物語の注釈書の注や訳文を参考に用いた。

(A)　日本古典文学全集
(B)　玉上琢弥先生『源氏物語評釈』
(C)　新潮日本古典集成
(D)　新編日本古典文学全集
(E)　新日本古典文学大系

(一)　いつしか、雛をしすゑて、そそきゐたまへる、三尺の御厨子一具に、品々しつらひすゑて、また小さき屋ども作り集めてたてまつりたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。「儺やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事とおぼいたり。「げにいと心なき人のしわざにもはべるかな。今つくろはせはべらむ。今日は言忌して、な泣いたまひそ」とて、出でたまふけしき、ところせきを、人々端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛のなかの源氏の君つくろひ立てて、内裏に参らせなどしたまふ。（紅葉賀二〇頁―新潮日本古典集成による。以下同じ。）

右の文中の「端」について、現代の注釈書を見ると、(B)は縁、(A)と(D)は訳文に「端」としていて、どこの部分か不明瞭である。(A)(D)の「女房たちが端に出て拝見するので、姫君もいっしょに立ち出でて拝見な

平成11年9月30日受理　*文学部　国文学科（非常勤講師）

されて」という訳からすると、簀子をさしているようにもとれる。(C)は「御簾ぎわ」となっている。ここは廂の間の下長押に近い辺り、現代語では「端近な所」をいうのであろう。

辞書の「端」の語意中、家屋に関するものを見ると、

(1)『古語大辞典』(小学館)は、「家の内で、外に近い所。」

(2)『角川古語大辞典』は、「奥・内に対して、縁(ふち)・外れに当る所。平安時代の住宅では、中央の母屋(もや)に対して、簀子(すのこ)に近い廂(ひさし)の位置をいう。外を眺め、また外部の人に姿を見られやすい部位である。」

(3)『岩波古語辞典』は、「『奥』『中』の対。周辺部・辺縁部の意。」と説明し、「すみ。はずれ。」

(4)『旺文社古語辞典』は、「家の外側に近い所。特に、縁側。」

(5)『日本国語大辞典』は、「家屋の中央や奥に対して外側や周辺の所。寝殿造りでは、廂の間や簀子(すのこ)などをさす。」

などとある。(一)の端についていえば、(A)、(B)、(D)は、(3)(4)にいう所であり、(C)は(1)(2)にいう所となり、辞書においても二説あり、(5)は両説を含んでいる。以下、源氏物語の用例を検討してみよう。

(二)　日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて、花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに誦みゐたる尼君、ただ人と見えず。(中略)僧都、あなたより来て、「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。(中略)」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」とて、簾おろしつ。(若紫一八九～一九二頁)

源氏が北山で紫上の祖母の尼君を垣間見したところである。尼君は、簾を少し上げてはいたが、簾の中にいた。しかも、波線をつけた部分に、「中の柱に寄りゐて」というのだから、尼君は廂の間の奥の方にいたことになる。北山僧都は、尼君に「端」にいると苦情をいっているが、廂の間の奥の方にいても「端」というのは、廂の間が「端」の間だということになろう。

(三)　たとしへなく静かなる夕の空をながめたまひて、奥のかたは、暗うものむつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥したまへり。夕ばえを見かはして、女も、かかるありさまを思ひのほかにあやしきここちしながら、よろづの嘆き忘れて、すこしうちとけゆくけしき、いとらうたし。(夕顔一四七～一四八頁)

源氏が夕顔を伴った廃院での八月十六日の夕方の場面である。ここで端というのは、波線で示した「奥」に対している。

母屋、廂、簀子のある建物の場合、母屋と廂の間には長押があり、障子が建てられ、簾が掛けられる。廂と簀子の間には段差があり、長押には格子が建てられ、簾や壁代が掛けられる。こうして、母屋と廂は、屋の内であり、母屋が奥の方の間であるのに対し、廂は、(二)のように、「端」の間になる。そして、廂と簀子の境界の簾は、ここにい

われているように、「端の簾」ということになる。この時の「端」は廂の間をいったものである。

(四)　男君も、しひて思ひわびて、例の、しめやかなる夕つかたおはしたり。やがて端に御茵さし出でさせたまひて、「いとなやましきほどにてなむ、え聞こえさせぬ」と、人して聞こえ出だしたまへるを聞くに、いみじくつらくて、涙の落ちぬべきを、人目につつめば、しひてまぎらはして、「なやませたまふをりは、知らぬ僧なども近く参り寄るを、医師などの列にても御簾のうちにはさぶらふまじくやは。かく人伝なる御消息なむ、かひなきここちする」とのたまひて、いとものしげなる御けしきなるを、一夜もののけしき見し人々、「げにいと見苦しくはべるめり」とて、母屋の御簾うちおろして、夜居の僧の座に入れたてまつるを、女君、まことにここちもいと苦しけれど、人のかく言ふに、掲焉ならむも、またいかが、とつつましければ、もの憂ながらすこしゐざり出でて、対面したまへり。

(宿木二一六～二一七頁)

薫が二条院の中君を訪ねたところである。先夜、薫が中君に添い臥し、匂宮に移り香をとがめられたこともあり、この日は薫が訪問してくると早速「端」に茵を出した。諸本すべて「はし」とある。波線(1)の部分に、中君は取次をもって「聞こえ出だし」たとある。また、薫の訴えにより、波線(2)の部分に見られるように、女房は「母屋の御簾」をおろして「夜居の僧の座」に入れた。そこで、中君は、「すこしゐざり出でて」対面している。この記事からすると、最初、茵を出された「端」は簀子であり、夜居の僧の座は廂の間であったと考えられる。(A)(B)(C)(D)(E)いずれも簀子とされている。

(一)から(三)までの例では、「端」は廂の間、または、廂の間の下長押の辺りを指していたのに、(四)の「端」は簀子である。明らかに異る場所についていわれている。

(五)　宵もや過ぎぬらむと思ふほどに、沓の音近う聞ゆれば、あやしと見いだしたるに、時々かやうのをりに、おぼえなく見ゆる人なりけり。「今日の雪を、いかにと思ひやりきこえながら、なでふ事にさはりて、その所にくらしつる」などいふ、「今日来ん」などやうのすぢをぞいふらむかし。昼ありつることどもなどうちはじめて、よろづのことをいふ。円座ばかりさし出でたれど、片つかたの足は下ながらあるに、鐘の音なども聞ゆるまで、内にも外にも、このいふことはあかずぞおぼゆる。(枕草子「雪のいと高うはあらで」)

枕草子の文であるが、この文において、女達の所へ訪れた男にさし出した円座は、波線(1)の部分「片つかたの足は下ながらある」ことによってわかるように簀子であり、そこは、波線(2)の部分にみられるように、女達のいる「内」に対して「外」である。母屋と廂の間は屋の内であるのに、簀子は屋の「外」であり、(四)に見られるように「端」である。このように簀子は屋の「端」であるが、簀子といわず、「端」という時は、(四)の例のように、母屋や廂の外にある客の座として特別の意味をもっているようである。

(六)　皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風はげしく、川

波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、来し方行く末もおぼえで、簀子の端に足をさしおろしながら、行くべき方もまどはれて、（手習一八九頁）

横川僧都一家に救助された浮舟の回想の部分である。波線をつけた部分のように、浮舟は失踪に当り、妻戸を開けて外に出、「簀子の端」に腰を下ろし、足を垂らしていた。「足をさしおろし」たのだから、簀子の外側の端だったことになる。

(七)　守出で来て、灯籠かけそへ、火明くかかげなどして、御くだものばかり参れり。「とばり帳もいかにぞは。さるかたの心もなくては、めざましき饗ならむ」とのたまへば、「何よけむとも、えうけたまはらず」と、かしこまりてさぶらふ。端つかたの御座に、仮なるやうにて大殿籠れば、人々もしづまりぬ。（中略）「ここにぞ臥したる。客人は寝たまひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されどけどほかりけり」と言ふ。寝たりける声のしどけなき、いとよく似かよひたれば、いもうとと聞きたまひつ。「廂にぞ大殿籠りぬる。音に聞きつる御ありさまを見たてまつりつる、げにこそめでたかりけれ」とみそかに言ふ。（中略）「まろは端に寝はべらむ。あなくるし」とて、火かかげなどすべし。（帚木八四～八七頁）

源氏が方違えに紀伊守の家に来た時である。源氏の座席は、涼しげな庭が眺められるようとの配慮からであろう、「端つかたの御座」であった。源氏はそこに寝たとあり、小君は空蝉に、源氏は、波線をつけた部分に見られるように、「廂」に寝たといっている。廂は寝殿造りの建物の「端つかた」の間なのである。

小君の寝た「端」については、(B)は廂、(E)は「そとのほう」とある。(B)は(二)の場所、(E)は(三)の簾の近くという理解であろう。

(八)　秋の夕のものあはれなるに、一条の宮を思ひやりきこえたまひて、わたりたまへり。うちとけ、しめやかに、御琴どもなど弾きたまふほどなるべし、深くもえ取りやらで、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり。端つかたなりける人の、ゐざり入りつるけはひどもしるく、衣の音なひも、おほかたの匂ひかうばしく、心にくきほどなり。（横笛三二六頁）

夕霧が一条邸に落葉宮を訪ねた所である。折柄、南の廂で琴を演奏していた落葉宮は、琴を奥へ入れもせず、夕霧を南の廂へ通した。女房達は「端つかた」にいたが、いざりながら奥へ入ったという。落葉宮が廂の間にいたのだから、この「端つかた」とは、廂の間の簾に近い所、下長押の辺りである。「端つかた」という語も、(七)は廂を、(八)では廂の隅、下座をさしている。

(九)　「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、里びたる簀子の端つ方にゐたまへり。（東屋三三六～三三七頁）

薫が浮舟のいる三条の隠れ家に訪れたところで、源氏物語絵巻にも描かれた場面である。絵では、幅の狭い簀子に薫は腰をおろしている。「簀子の端つ方」は簀子における位置を示し、(B)(E)は「縁側の端の方」、(C)は「縁先」としている。「簀子の端つ方」とは、簀子の外側の方のことである。

(ロ)「あはれ山伏は、かかる日にぞ音は泣かるなるかし」と言ふを聞きて、われも今は山伏ぞかし、ことわりにとまらぬ涙なりけり、と思ひつつ、端の方に立ち出でて見れば、はるかなる軒端より狩衣姿色々に立ちまじりて見ゆ。（手習二三七～二三八頁）

小野の山里の家でのことである。この「端の方」を、(A)(D)は端近、(B)は縁側、(E)は簀子とある。(B)と(E)との場所は同じであり、室外であるが、(A)(D)は室内である。

蓬生の巻に「廂の端つかた」（七三頁）、(ハ)に「簀子の端つ方」とあるが、「はしのかた」は、どこのという限定の語もなしに、「はしのかた」のみで、廂の間の簾に近い方、下長押の辺り（現代語で「端近い所」という辺り）を指す例ばかりで、簀子の端を指す例はないようである。(ロ)も浮舟は外の景色が見える御簾近くに出て来たものと解される。

(ニ) 姫君、いとはづかしきにも、そこはかとなく涙のこぼるれば、はしたなくて背きたまへる、らうたげさ限りなし。いかにせまし、なほや進み出でて、けしきをとらまし、などおぼし乱れて立ちたまひぬる名残も、やがて端近うながめたまふ。（梅枝二七五頁）

頭中将が雲井雁の所へ来て、娘の扱いに思い乱れて帰ったところである。(A)は「端近いところで」、(C)は「部屋の端近くにいて」、(D)は「端近く」、(B)は「縁近く」とあり、場所は同じである。しかし、(B)は(一)の場合と同じく、「端近く」の「端」を縁と解していられるようである。(C)は、(一)では「御簾ぎわ」とあり、ここでは「部屋の端近く」となっている。(A)と(D)が(一)では「端」とあり不明瞭であるが、ここでは端近いとなっており、(A)と(D)は、(C)と同様に解されているものと思われる。(B)のように「端」が縁、すなわち簀子の意に用いられることは、(四)の例のように特殊な場合で、「端近し」の「端」は(B)のように解すべきではあるまい。

野分の巻に、「（紫上ハ）すこし端近くて見たまふ」（一二四頁）、浮舟の巻に、「大将、人にもののたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに」（四九頁）というのがある。これらの場合は、「端近く」ての場合と異り、廂の間の少し端（下長押の辺り）に近い所を指すことになる。

(ホ) 衛門の督は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。大将は、心知りに、あやしかりつる御簾の透影思ひ出づることやあらむと思ひたまふ。いと端近なりつるありさまを、かつは軽々しと思ふらむかし、いでや、こなたの御ありさまの、さはあるまじかめるものを、と思ふに、（若菜上一二九～一三〇頁）

女三宮を垣間見た柏木の心中を夕霧が察するところである。「端近なり」における「端」は、屋の内の端、廂の下長押に近い辺りをさしている。

薄雲の巻で、雪の朝、「来しかた行く末のこと」を思いつづけた明石君について、「例はことに端近なる出で居などもせぬを」（一五三頁）といい、竹河の巻で、桜の盛りに、玉鬘の二人の娘が廂の簾をあげて

碁を打つところで、「のどやかにおはする所は、まぎるることなく、端近なる罪もあるまじかめり」（二一四頁）といっている。普通なら、女主人や姫君は「端近なる」所に出ぬものとする立場でいわれている。

以上、源氏物語の中で、建物に関して「はし」という語によって表現されている場合について検討してきたところ、「はし」には、ⓐ廂の間、ⓑ廂の間の下長押に近い辺り、ⓒ簀子をさす三通りの用法があり、「はしつかた」にはⓐとⓑの例があり、「はしのかた」「はしちかし」「はしぢかなり」においてはⓑの例のみであること、また、「～のはし」というように場所を限定する語を伴う時は、建物の内側から外側へ向う方向にある所を示すのに「はし」という語が用いられていることがわかった。

先に(一)の例文について述べた中で、五種の辞書の関係する記事をあげたが、その中の一書、『旺文社古語辞典』は、例文として次の大和物語一四九段をあげている。

(三)　さていでていくとみえて、前栽の中に隠れて男や来るとみれば、端にいでゐて、月のおもしろきに、頭かい梳りなどしてをり。

日本古典文学大系、日本古典文学全集、新編日本古典文学全集、柿本奨氏『大和物語の注釈と研究』は、「端」をいずれも縁側とされている。縁側とは簀子のことであろう。女が外からあらわに見える簀子に出て髪を梳るという理解は受け入れがたい。「端にいでゐて」は(一)の「端に出でて」と同様、廂の間の下長押の近くに出てということであろう。

（注）「簾の『つま』・『はし』―紫式部日記覚書―」（滋賀大国文第二八号、『紫式部日記攷』所収）、「ふみのはし考」（滋賀大学教育学部紀要第四二号、『源氏物語攷』所収）